八重干瀬(やびじ)の形状の琉球国絵図(正保)における表現

我那覇　念

１　はじめに

八重干瀬(やびじ)とは宮古諸島池間島の北方海域に分布するサンゴ礁群を総括する名称である。八重干瀬の南３km余に池間島があり、八重干瀬の南東端の東方約７kmにフデ岩が、フデ岩の南南西約８kmには大神島がある。池間島・大神島と宮古島は、それぞれ１km余、３kmほど離れていてサンゴ礁の発達する浅海域である(図１)。

八重干瀬を構成するサンゴ礁の詳細な分布状況は国土地理院発行の５万分の１地形図「宮古島北部」にそれぞれのサンゴ礁名を付して示されている(図２)。同地形図を見ると、八重干瀬は概ね南北方向に延びているが、その南半部は南東方向に広がっている。これらのサンゴ礁は、一般的な傾向として北西側のサンゴ礁は干潮時に干出し、南東側は干出しないものが多い。

ところで八重干瀬に関する古い地図に 1648 年に作製された「琉球国絵図」（以下「絵図」）がある(図３)。「絵図」には関連史料として「(悪鬼納島)絵図帳」と「宮古八重山両島絵図帳」（以下絵図帳)があり、各村・島の石高や沿岸域のサンゴ礁の分布状況、各種の計測値など「絵図」に書き込まれなかった情報が記されている(『琉球国絵図史料集第一集』以下『琉球国絵図』)。

「絵図」では、八重干瀬は白色で着色されていて海洋の藍色に映えるように表現されている。その白色部分にはサンゴ礁名とその規模を示す数字が墨書されている。白色で表現されている八重干瀬の形状は、南北方向に長軸を有す

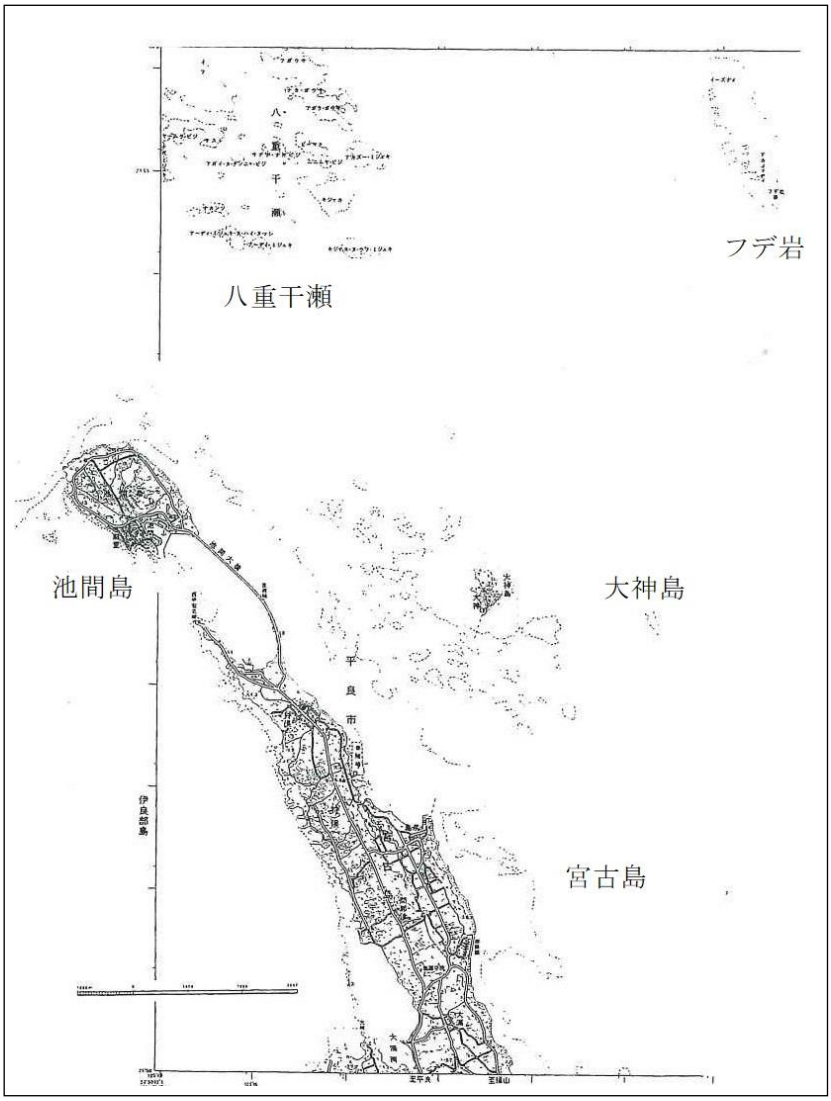

図１　八重干瀬及びその周囲の島々

（５万分の１地形図「宮古島北部」；国土地理院発行を一部改変・縮小、１目盛１km）

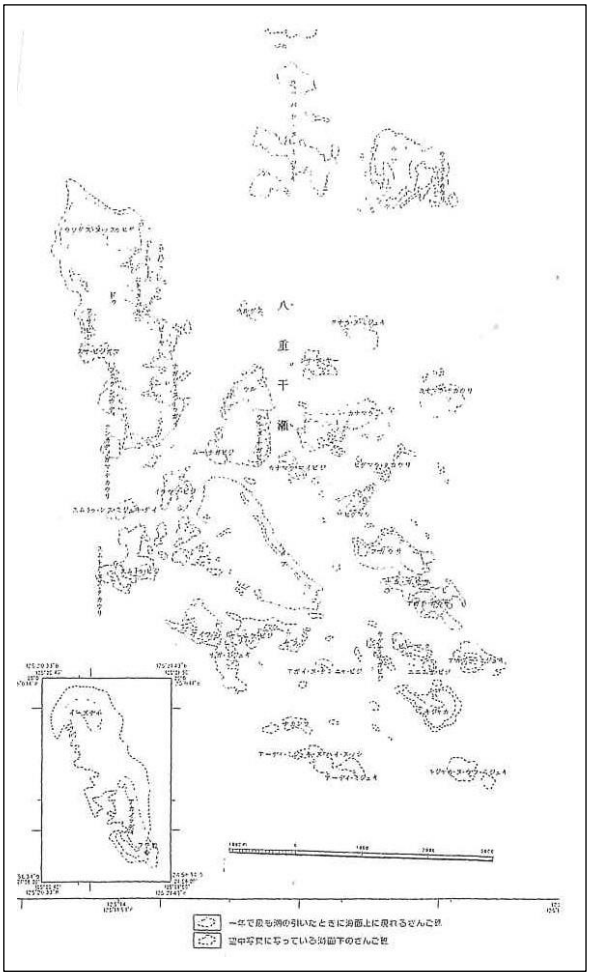

図２　八重干瀬のサンゴ礁の分布

（５万分の１地形図「宮古島北部」；国土地理院発行を一部改変・縮小、１目盛１km）

る中核部分から南北両端が岬状に南東方向に延びており、南側の方はフデ岩が最先端となっている。この「絵図」に描かれている八重干瀬の形状は実際とは大きく異なっている。八重干瀬を実際と大きく違う表現にした理由を示す記録は見当たらない。八重干瀬を表現する際に、「絵図」を描いた作製者の思い・考えが反映されている可能性が考えられる。

そこで本稿では、「絵図」の直接の作製者が八重干瀬の表現に込めた思い・考えを推測することを試みる。そのために、八重干瀬の地理的環境、「絵図」に描かれている八重干瀬の平面形・色彩・周辺の海岸地名・島名、池間島に伝

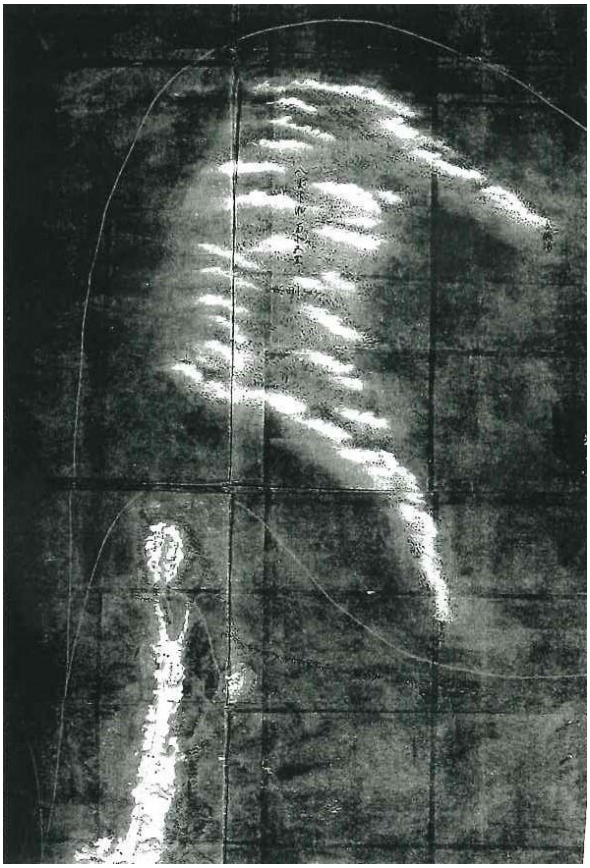

図３　八重干瀬の絵図

（『琉球国絵図史料集第一集』（正保）より）

わる伝承などを分析・考察する。

２　「絵図」における八重干瀬の表現

本稿では 1648 年に作製された「絵図」に表現されている八重干瀬を対象とする。

「絵図」は、陸上では主要道及び里程、集落の分布などが、海上では島嶼間の航路、主要島嶼間航路の距離、海岸線の詳細な出入り、サンゴ礁の分布などが図示されている[※1]。主要な港や入り江については、船の出入りの利便性、碇泊地としての条件などについての記述も見られる[※2]。

「絵図」では八重干瀬は白色に着色されている（『琉球国絵図』p. 84）。その白色は、一様ではなく南北方向に濃淡を交互に繰り返す色付けにしており波浪を表現しているように見える。さ

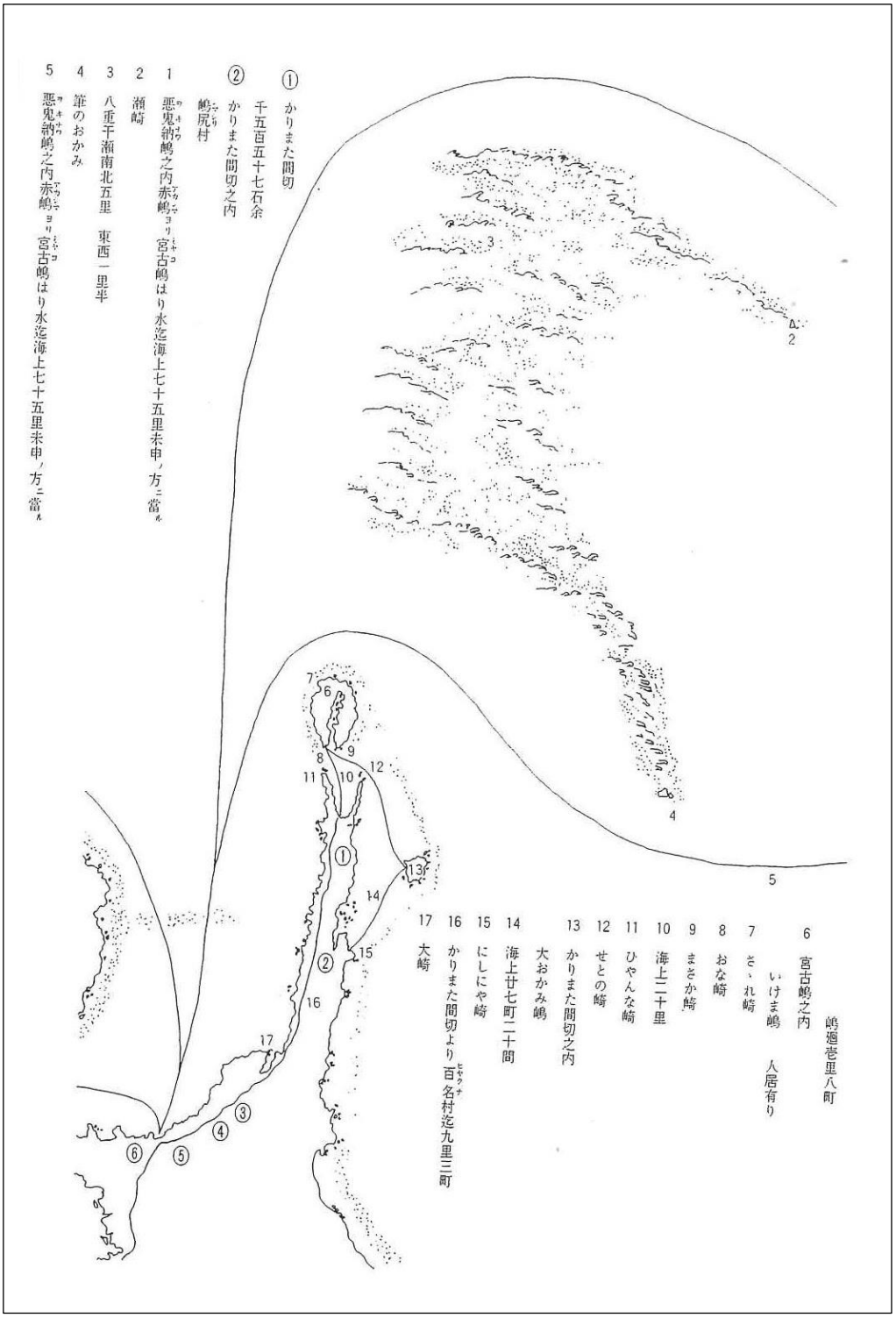

図４　八重干瀬及びその周辺の島々の島名と海岸地名

（『琉球国絵図史料集第一集』（正保）より）

らにこの白色部分には細かい黒点が多く見られる。周辺の島々の海岸部にも同様の黒点が見られることから、サンゴ礁を表していることがわかる。この白色に着色された部分には、縦書きで「八重干瀬南北五里」、横書きで「東西一里半」とサンゴ礁名と規模が墨書されている。「絵図」に描かれている八重干瀬の形は、その北端部と南端部が南東方向に延びた“地曳網”状になっており、南端部の先端は独立した存在であるフデ岩まで達する形で描かれている。一方八重干瀬の西側部分は出入りのない直線状の形状に描かれている。なお「絵図」では、フデ岩は「筆のおかみ」大神島は「大おかみ嶋」と墨書されている（図４）。

３　八重干瀬及びその周辺地域の地理的環境

本節では、八重干瀬を中心に漲水港－沖縄島間の航路沿いの海域の地理的環境について、自然的環境と人文的環境にわけて述べる。

（１）自然的環境

八重干瀬は、沖縄県宮古諸島の北端に位置する池間島の北方３～20 ㎞余に広がるサンゴ礁群である。八重干瀬を構成するサンゴ礁は、概ね南北 17 ㎞ほど、東西６ほどの範囲内に分布し[※3]、その詳細な分布状況は、国土地理院が 2000 年に発行した５万分の１地形図「宮古島北部」にも表示されている。これらのサンゴ礁には、干潮時に干出するサンゴ礁だけでなく干出しないサンゴ礁も多く見られる[※4]。このような環境は船の航行に支障をきたす大きな要因となる。

八重干瀬の南側は、池間島北海岸の裾礁までの海域は水深が深くて船の航行の障害となるサンゴ礁は発達していない。

また八重干瀬の南東端から東方約７㎞、池間島から東北東約 12 ㎞にフデ岩が位置している。面積が 0.01 ㎢、海抜高度が 10ｍ未満の琉球石灰岩からなる低平な島である[※5]。植生は低木が散在するのみである。フデ岩の海岸には北北西方向に 2.5 ㎞ほど延びているサンゴ礁が発達している。フデ岩の南南西約８㎞には大神島が位置している。

大神島は、面積が 0.14 ㎢で、海抜高度が 74.7 ｍの概ね円錐形をなし（２万５千分の１地形図「西平安名岬」）、宮古諸島北部地域では目立つ存在である。島の南東～南～北北西の海岸にはサンゴ礁が発達している。このサンゴ礁の北北西端から八重干瀬の南東端まで５㎞ほどあり、その間は水深も深く船の航行に支障をきたすようなサンゴ礁の発達は見られない。

大神島の南西海岸と宮古島北部東海岸とは最短距離で３㎞ほど離れ、水深が浅くサンゴ礁も発達している。

（２）人文的環境

「絵図」に描かれている内容を理解するためには、当時の人文的環境を把握する必要がある。

「絵図」作製のころ、宮古島の北西海岸にははり水泊（漲水港、平良港）があり、その南には平良の集落が立地していた。平良には琉球王府の出先機関である蔵元の創設（1488 年）、航海安全祈願所である漲水御嶽の石垣の整備（1504 年）、祥雲寺・権現堂の創建（1611 年）などが行われた。これらのことは宮古地域での平良の主邑化、それに伴う漲水港の重要港化を示すものと言える。

漲水港は、平良の市街地にある住屋遺跡から 12 世紀の九州系の石鍋が出土している（『みやこの歴史』p. 48）ことから「絵図」作製の数百年前から利用されていたと思われる。

また 1390 年の宮古から中山への入貢、1462 年及び 1478 年の宮古から那覇への朝鮮人の移送、1522 年の日本製刀剣の治金丸の王府への献上などが行われている（上掲書、年表）。これらの事例では船出した港の記述はないが、朝鮮人の宮古地域北西部における滞在期間の長さ、治金丸の発見地の伝承のある洞穴泉（降り井）が近くにあることなどから、15 世紀後半には宮古地域と沖縄諸島との間には船の往来があって、漲水の海岸に港があったことが推測される。

「絵図」には、沖縄島及び石垣島から漲水港へ向かう航路が朱線で示されている。前者の航路が八重干瀬に関係する。この航路は、八重干瀬の北と南を通り池間島を迂回し狩俣集落の西の海上で合流して漲水港に向かうように示されていて、朱線の側の説明書きから沖縄島とを結ぶ航路であることがわかる[※6]。

さらに「絵図」には島嶼間を結ぶ航路が細い朱線で示されている。宮古諸島北部地域には、池間島と宮古島北端の西の浜、池間島と大神島、大神島と宮古島の島尻との間にそれぞれ航路があることを示す朱線がひかれている。さらに「絵図」には池間島や大神島が有人島であること、狩俣・島尻の集落があることも記されている。

また燧火の制（1644 年）の実施[※7]に伴う遠見の設置が行われ、宮古島北部地域でも池間島・大神

島・狩俣に遠見が置かれた。さらに池間島の住民には火立の役目も課された。[※8]

ところで、土地にまつわる神話や伝説は多くの地域で見られる。八重干瀬及びフデ岩についても、八重干瀬に気性の荒い弟神が、フデ岩に心優しい姉神が宿っているという姉弟神にまつわる神話が池間島には伝えられている。

４　分析と考察

「絵図」では、奄美諸島から八重山諸島までの島々及びその周辺海域の状況について記載している。奄美諸島の南半以南の島々については、その沿岸に発達しているサンゴ礁の分布についても「絵図」では細かい黒点で表示している。

八重干瀬は、既述の通りサンゴ礁の分布状況を地曳網状に捉え、それを他の沿岸域のサンゴ礁の表現と同様に細かい黒点で示すとともに、さらに白色で着色している。[※9] 藍色の中では細かい黒点だけでの表現と違って白色は目立つ。描かれている八重干瀬の形状は実際とは大きく異なっている。周辺の島々の海岸の詳細な出入りが描かれているのとは対照的である。その背景にある理由を複数の視点から検討する。

【形の視点から】

そもそも「絵図」は、江戸幕府の命で全国統一基準で作製された国絵図の一つである。そして「絵図」の作製を実際に行ったのは薩摩藩士と幕府推薦の江戸の狩野派の絵師（以下、両者をまとめて作製者）であった。[※10]「絵図」には絵図作製に当たっての留意事項に港や海岸の詳細な状況、陸上の目標物、主要航路の方角・海上距離、航行上の障害物などを記することが見られることから、航海者の視点で描くことが要求されていたことがわかる。

そのため「絵図」における宮古諸島の陸地の表現は、主な道路、集落、“山当て”となる目標物などの主要事項が重視され、山の分布や形の表現は作製者の裁量によって描かれたと思われる。そのことは宮古島や伊良部島における山の分布・形状、宮古島北部の岬の形状などの描き方が実際とは異なることから推測される。宮古島や伊良部島には、「絵図」に見られるような独立した山形をなす山はない。また宮古島北部の岬は、その付け根寄りにある東方へのせり出しが無視されて先端の２つの触角状の小岬の付け根までほぼ同一の幅で描かれていて鏃（あるいは矢の一種）の“かりまた”を想起させる。このことは「絵図」作製のために宮古諸島へ渡島した作製者は、この岬の地形がかりまたを思い起こさせる形状だと認識し、それを作図に反映させたと思われる。

このように「絵図」を実際に描く際に作製者の裁量で描くことができる余地があるならば、八重干瀬の表現にも作製者の思いや考えが込められている可能性が考えられる。換言すれば、作製者は八重干瀬についての印象を初見のときのそれに集約させて「絵図」における八重干瀬の表現に反映させたと思われる。

前述の通り作製者の一人の絵師は江戸から派遣されており、陸地から遠く離れた海洋中にある広大なサンゴ礁の実態を八重干瀬で初めて経験したと考えられる。絵師が宮古諸島を訪れた際に八重干瀬を初めて見たときの印象を示す史料は見当たらないが、絵師が八重干瀬を初見したときに感じたであろう印象を推察するうえで参考になると思われる事例がある。

八重干瀬を初めて船上から見たときの人がどのような印象を持つかを示した記録がある。1893（明治 26）年に青森県から宮古諸島を初めて訪れた笹森儀助による記録である。笹森が那覇で乗船した大有丸は、７月６日早朝に大神島を西南西の方角に見ながら宮古諸島北部に接近し、フデ岩と大神島の間を通って八重干瀬の南側へと向かった（『南島探験１』p. 172）。初めて

八重干瀬を間近で見た笹森は、その時の印象を次のように記している。

「右舷ニ倚リ八重干瀬ヲ諦観スルヤ、起伏常ナク、巉巖尖塔ノ如キアリ、或ハ猛獣ノ伏スル如キアリ、大洋ノ巨濤之レニ激シ、其噴沫飛テ濛霧ノ船ヲ覆フカ如シ。見ル者悚然タリ」（『南島探験１』p. 173）

笹森が八重干瀬の波涛の状況に圧倒されたことが窺える。笹森のこのような印象を絵師も持った可能性が高いと思われる。

八重干瀬は、「絵図」ではフデ岩も一体化して地曳網状に描かれていることは前述した。作製者は、現地調査のために宮古諸島を訪れた際は「絵図」に描かれている八重干瀬南側の航路で渡島したと思われ、当然八重干瀬とフデ岩が離れた別個の存在であることを確認していたと考えられる。

しかし「絵図」の関連史料である絵図帳には八重干瀬について次のように記されている。

「八重干瀬
一　南北三里東西壱里六町四拾間
一　此干瀬ふてのおかミハいけま嶋ゟ寅之方此間弐里拾町
一　此干瀬西之はすれハいけま嶋ゟ亥之方此間壱里拾六町
一　ふてのおかミゟ西北之角迄五里」
（『琉球国絵図』p. 129）

この記述内容から八重干瀬の大きさを示す数値が「絵図」とは違うこと（南北が５里→３里、東西１里半→１里６町 40 間）、八重干瀬とフデ岩を一体として捉えていること、方位と距離を重視していること、八重干瀬の東西両端の位置・方位の基点を池間島に置いていることなどがわかる。池間島を基点にしていることは、八重干瀬近海ではその南側を航行し、その際の陸地の目標物、いわゆる“山当て”が池間島であることを示していると言える。これは池間島を迂回して航行する必要があったからでもある。

このように作製者が八重干瀬の南側の航路を重視していることは、絵図帳でこの航路沿い南側の海岸のサンゴ礁の分布状況や船舶の往来の可否について記していることからも窺える。絵図帳には池間島の北海岸（八重干瀬側）にはサンゴ礁が分布していること、池間島と宮古島北端の間・池間島と大神島の間・大神島と宮古島の間にはいずれもサンゴ礁が分布して満潮時でも荷船の航行は出来ないことなどが記され、海岸近くの航行を回避すべき海域が具体的に示されている。

一方同航路沿いの北側は、前述のとおり八重干瀬の南端の東西端の位置・方位を示すことによって航行上注意すべき範囲を示唆しているだけである。

このように八重干瀬南側の航路沿いの海況の記述には、同航路の北側と南側で差が見られる。南側が詳細であるのに対し、北側は東西両端の位置は示されているがその間の海況の記述は見られない。実際の八重干瀬とフデ岩は離れており、その間にはサンゴ礁の分布しない船の航行可能な海域があるが絵図帳には記されていない。実際のサンゴ礁の分布状況を記すと「絵図」に描かれている八重干瀬の形との間に矛盾が生じることになる。

また、絵図帳では八重干瀬南側の東端「此干瀬ふてのおかミ」と西端「此干瀬西之はすれ」の間の距離の記述がなく、周辺の２地点間の距離が提示されていることからみて意図的に記述しなかった可能性が考えられる。

絵図帳に記されている池間島を基点にしたフデ岩と八重干瀬西端の方角は実際のそれに一致している。このことから池間島・フデ岩・八重干瀬西端を線で結ぶと概ね直角三角形となる。絵図帳に記されている数値を用いて三角関数で求めたフデ岩と八重干瀬西端の間の距離は概ね

10.6 ㎞となる[※11]。絵図帳で示されたフデ岩から八重干瀬西北角までの五里(約 20 ㎞)の半分ほどの距離であり、計測は可能であったと考えられる。

また同史料の中で八重干瀬は東西距離が壱里六町四拾間(約 4.7 ㎞)と記しており、「絵図」作製者は八重干瀬からフデ岩までの間にサンゴ礁の分布しない海域があることを認識していたと考えられる。

これらのことから「絵図」に描かれた八重干瀬の形を通して、「絵図」の閲覧者に伝えたいという作製者の何らかの意図が込められている可能性が考えらえる。

フデ岩の北側から進入して八重干瀬南側へ向かうことも不可能ではないが、船の針路変更を短時間に行う必要があり帆船にとって厳しい条件である。その点、フデ岩南側からは直線的に八重干瀬南側に向かうことが出来る。このことを踏まえて、作製者は航行の難所である八重干瀬近海で選択すべき針路を強調するために相応しい描き方について検討したと思われる。

当時、日本各地の砂浜海岸には地曳網漁がすでに行われていて[※12]、網の内側の魚類を一網打尽にすることが出来ることを人々は知っていた。地曳網漁が行われている地域、いわゆる地曳網漁文化圏とも言える地域の人々にとって、地曳網は共通の言語とも言えるものであったであろう。

このような地曳網漁文化圏の人々を「絵図」閲覧者として想定するならば、八重干瀬を地曳網状の形に描くことには理由があると言えよう。そしてその地曳網の開口部は、八重干瀬の南に向けて北東方向から進入して来る船の方角に開口させる必要がある。そのために作製者は、八重干瀬南端部を岬状に南東方向に延ばして地曳網の形状にするとともに、その最先端に筆のおかみを設けたと思われる。筆のおかみ(フデ岩)は、視覚的に確認できる航行上の具体的な目標物(山当て)であると同時に安全航海の守護神の鎮座する場所として位置づけられていたと推測される。

「絵図」作製者は、八重干瀬が航海上の難所であることを十分に認識し、その危険性を「絵図」閲覧者に強く印象づけたい思いが強かったと思われる。そのために作製者は、八重干瀬とフデ岩の間が広く開いていて十分に航行可能であることを承知したうえで、当時の人々の持っている地曳網に対するイメージを踏まえて八重干瀬とフデ岩を一体化させて地曳網の形に描くに至ったと推測される。

【色彩の視点から】

「絵図」に描かれている沖縄島以南の島々の海岸には、藍色で着色された海域部分に多数の細かい黒点が見られることからサンゴ礁の分布を表現していることがわかる。

一方八重干瀬は細かい黒点と白色を併用して表現されていて海洋を示す藍色に映える。八重干瀬の存在を示すだけであれば、白色以外にも藍色に映える明色系の色の使用も可能であったと考えられる。実際に「絵図」では島の表現は明るい黄土色系の色が使用されており、海洋を示す藍色の中で映えている。作製者は、航行上の難所と認識した八重干瀬の存在を強調するために意識的に白色を選んだ可能性が考えられる。

そこで本項では、その白色に込められた作製者の意図がどのようなものであるかを推察するために、関連する文献資料や八重干瀬の地曳網状の形も活用しながら検討する。

最初に白色に対する感覚について。色に対する感覚は、例えば中国では赤(紅)を、アラブ諸国では白を、それぞれ好む傾向が見られるように文化の違いによって異なる。また同じ色でも、場面・状況によって別の感覚で受け止められる

ことがある。一例として、同じ赤色でも、衣装の色として使用すると華やかさを、血の色としてみると危険・汚れをそれぞれ表している。このように色には二面性を有するものがある。

白色にも二面性がある。日本文化における白色は、“白無垢”という言葉に象徴されるように慶事に関わる色であり、“死に装束”という言葉で表現されるように弔事に関わる色でもある。場面によって真逆の受け止め方をされるのが白色の大きな特徴の一つと言える。

また白色についての人々の印象には自然現象も影響を及ぼしていると思われる。例えば、川が洪水を起こしたり、海が時化たりすると水面が白濁化し、そのような状況に遭遇した人々は生命の危険を感じるであろう。川や海における広範囲の白濁化を伴う自然現象は、“白色は危険を告げる色”との印象を人々に与えていると言える。言い換えると、人々は白色で描写された川や海域は近づくことを回避すべき危険な場所を示していると認識していることになる。

この“白色は危険を告げる色”という人々の印象は、伝説や祭神に形を変えて人々の間で伝承・信仰されるようになる。その一つに青森県の伝説“白髭水”がある。白髭とは大洪水のことである。その概要は次のようである。

「岩木川下流の古館の村近くで、ある年、白髭の翁が御幣を振って、津波が寄せてくる、山から水が湧いてくる、大勢の人が滅びるであろうと触れ回った。やがてそのとおり洪水が起こり、多くの人が滅んだ。」（『日本伝奇伝説大事典』p. 472）。

また 1347 年に南部地方（青森県）で白髭水とよぶ洪水がおこった。長雨が続き、河川が溢れたとき、白髭を長くなびかせた翁が、丸太に乗って流れてきて「われは白髭の翁なり」と名乗ったという（上掲書 p. 472）。

新潟県栃尾市にも青森県の伝説と似たような事例があるという。話の内容は以下のようである。

「昔、大洪水のとき白髭の老人が現れ、夜明けに村人に大声で、大水が出るから早く逃げよと知らせた。」（上掲書 p. 472）。

これらの伝説の基本は、白髭の翁が事前に現れて洪水の発生を予告することである。このような話は岩手県や福島県にも見られるという（上掲書 p. 472）。

さらに新潟県頸城郡には雪崩の上に乗った白髪白衣の老翁が現れて雪崩の流れる方向によって農作物の豊凶を予告するという伝説の記録がある。その概略は次のようである。

「〈前略〉伝ていふ、白髪白衣の老翁幣をもちてなだれに乗り下るといふ。また此なだれ須川村の方へ二十町余の処真直に突下す年は豊作也。菖蒲村の方へ斜にくだす年は凶作也。〈後略〉」

（『北越雪譜』p. 94～95）

この伝説では洪水ではなく雪崩になっているが、話の基本形は白髭水と同じである。

このような白髭水の伝説に類似する事例が、伊良部島や石垣島にも見られる。

伊良部島には津波の襲来に係るヨナタマ伝説が「宮古嶋記事仕次」（1748 年）にみられる。その概略は次の通りである。

「昔、伊良部嶋の下地村でよなたまという人面魚躰のよくもの言う魚が釣り上げられた。その夜半に、隣家の子どもが急に激しく泣き出し伊良部村に行こうと母親に言った。そのとき、よなたまを呼ぶ声が遠くから聞こえ、よなたまが“急いで犀で迎え（助け）に来て”と応えた。驚いた母子は伊良部村へ急いで逃げた。翌朝村へ戻ってみると跡形もなかった[※13]」

（『平良市史　第三巻』p. 82～83）

このヨナタマ伝説では、話すことが出来る珍

しい魚のヨナタマが、伝説の文中には明示されていないが同種の親あるいは仲間に対して緊急の救助を求めている。そのためには急いで大波(津波)を起こせとのことであり、津波の襲来の直前を意味していると言える。このように解釈すると、ヨナタマは神の化身であり、津波の襲来を直前に人々に告げていることになる。

そしてヨナタマとはジュゴンのことと思われる。そうであればジュゴンは、体の表面は白く、その数は多くはなくて人々の眼に触れることはまれな生き物である。この白い生き物に話すことを可能にさせ、その口を通して津波の襲来を直前に告げさせている。神の化身としてのジュゴン(ヨナタマ)が白色であることから、その神は白い装いをしていると思われる。

また伊良部集落には、白髪の老神が登場する由来をもつ石泊御嶽がある。同御嶽は集落東方の海岸端にあり、樹木が生い茂った平坦な地形の場所である。西には渡口の浜という砂浜があり、その西端(水路の南東側の出入り口)には古い時代には船着き場があったという(『伊良部村史』p. 392)。また石泊御嶽前面は潮の流れの速い海域である。当該御嶽の由来について「雍正旧記」(1727 年)には次のように記されている。

「石泊御嶽男神中勢大とのと唱
右由来ハ昔神代に此石泊山ニ磯の神と白髪の老神立顕れ為申由にて村中中古迄祭申候事」(下線は引用者)。

この石泊御嶽の神は白髪の老神で磯の神と自ら名乗っていて、その容姿は白髭水の伝説に出てくる神の容姿と似ている。磯の神は海岸で起きる総ての事象をつかさどり、津波もその対象に含まれることになる。この磯の神がヨナタマの行為を通して津波の襲来を直前に人々に告げたと解釈することも可能と思われる。すなわち別々の話であるヨナタマ伝説と石泊御嶽の由来をまとめると、白髭水の伝説と同じような内容の話になると言える。

この伊良部島における伝承よりもさらに白髭水の伝説に近い内容を伝えているのが石垣島大浜の崎原御嶽の由来である。

石垣島大浜の崎原御嶽の由来については「琉球国由来記」(1713 年)の巻二十一に記されていて、その概略は次のとおりである。

「崎原御嶽の由来。昔、大浜村に２人の兄弟がいて、薩摩の坊ノ津へ鉄製の農具を買いに行きました。そこの下町という泊へ着き農具を買った。すると白髪の老人が現れ、櫃を授けながら“この櫃の鳴く方向に船を進めれば八重山に無事着くことができる”と教えた。その通りに進んだら大浜村の崎原の泊に無事到着した。[※14]」(『琉球国由来記』巻 21　p. 600～601)。

薩摩藩坊ノ津に行った折に、浜辺に白髪の老人が船出の前に現れて安全航海の方法を教えている。老翁神の教え通りに航海して無事に崎原泊に帰着したという。このように崎原御嶽の由来の伝承には、事前に白髪の老人が現れて天変地異を告げるという東北地方や新潟県の伝説にみられるようなパターンが見られる。当該御嶽の由来の中に薩摩藩坊津という地名が見られることから、由来の基本形は当該地から導入されていたことが考えられる。15～16 世紀の勘合貿易が行われていた頃には坊ノ津は堺との間に航路が設けられていたことから、京都や大阪に集まった全国各地の様々な情報が堺を経由して坊ノ津にも伝わり、その中に東北地方の白髭水の伝説が含まれていた可能性が考えられる。そして坊ノ津の人々の間で伝えられていた東北起源の伝説の中の白髭の老翁神は、航海安全の神として崎原御嶽に祀られるようになったと推察される。

これまで述べてきた白髭水の伝説やその類似の伝説・伝承は、天変地異を直前に人々に告げ

ることが基本的内容であった。予告の神ではなく救いの神としての白髭の老翁神の事例もある。江戸の太田姫稲荷神社の祭神は白髭の老翁神であり、当該神社は現在も存在する。

この神社は 1458 年に創開されて疱瘡の神を祭っている。この神社の縁起によると、祭られている神は、小野篁が隠岐の島へ配流される途中の波涛のなかに白髪の老翁神が現れて篁に対し、「汝はまもなく赦されて都へ帰れるが、疱瘡の兆しが見えるのでわが身を写してまつるがよい、さすればその憂なかるべし」と告げたという（『江戸東京の庶民信仰』p. 215）。この伝承は当該神社の縁起絵巻の図にその光景が描かれている（上掲書 p. 214）。篁は赦された後に自身で老翁神の姿を彫刻して神像を作り山城国（京都府）の一口里（いもあらいのさと）に祭った。

その後太田道灌が疱瘡に罹った娘の平癒祈願のためにその分霊を江戸に勧請し疱瘡を平癒させたという（上掲書 p. 211）。このことなどによって太田姫稲荷神社の祭神が疱瘡の神として江戸の人々の間に知られるようになり、人々に信仰されていくことになったと思われる。疱瘡は、死に至る病でもあり、治ったにしても痘痕（あばた）面になる（『病が語る日本史』p. 49）という感染症であり、種痘が開発されるまで人々の大きな関心事であったと考えられる。

そのことが背景にあって、太田姫稲荷神社の祭神の信仰が広がっていったことは十分に考えられる。当該神社の祭神は天変地異を予告する神ではなく、危機的状況にある人々を救い出す神として位置づけられているのであるが、祭神の容姿は天変地異を予告する神と変わらない。

この太田姫稲荷神社の祭神の容姿について、「絵図」作製のために江戸から派遣された絵師は知っていて、白色は人々を災厄から守る神を表現する色の一つでもあると認識していたと推測される。

このように白髭水伝説の白髪の老翁神は、東北地方や江戸だけでなく九州南端、宮古・八重山まで見られる。このことから考えると、「絵図」の作製者は江戸と薩摩という遠隔の居住地であっても白色に対する人々の印象についての共通認識をもっていたと推測される。このことが八重干瀬を白色で表現することにつながっていったと考えられる。

「絵図」作製者は、人々の白色に対する危険予告や危機からの救出という印象があることを踏まえて、予告・救出の二重の意味を込めて白色で八重干瀬を表現したと推測される。

【地名の視点から】

「絵図」・絵図帳は、船の航行・碇泊に関わる各地の海岸の情報の掲載・記録を重視している。それらの情報には海域の状況だけでなく山当ての目標物となる山・岬・離島も含まれる。そのような目標物の地名の中には、航海者の航海安全の願いを込めた名称も見られる。

「絵図」には奄美諸島から与那国島まで「おかみ（おかミ）」の付く地名が航路沿いの海岸に多く見られる[※15]ことから、山当ての目標物に対して付けられた地名であることがわかる。おかみ（おかミ）とは神であり（小学館『古語大辞典』）、神の加護を願っての命名とも言える。おかみ（おかミ）は、奄美諸島では山に、サンゴ礁分布地域では岬や離れ島・岩に付けられることが多い。

宮古諸島の場合、「絵図」では４ヵ所の「おかみ」の付いた海岸地名が見える。①「筆のおかみ」②「大おかみ嶋」③「ひらせのおかみ崎」④「ねくれのおかみ」である。また絵図帳には⑤「ひゃくな崎之はなれおかみ干瀬」⑥「赤崎之おかみ崎」の２ヵ所が記されている。①と②は離れ島に、③④⑥は岬に、⑤は岬尖端の離れ岩に付けられている。

このうち①と②は沖縄島とはり水（宮古島）との間の航路沿いに、④ははり水と多良間嶋・川

平湊(石垣島)との間の航路沿いにある。①と②は、この２つのおかみ以西には八重干瀬や島周辺に多くのサンゴ礁が広がる海域があり、④の以西には水深の浅いサンゴ礁海域が広がっている。③は宮古島の北東岸にある東方向に少し突き出た岬で、その東方海中にはサンゴ礁が延びている。また当該岬の南には長い砂浜がある。⑥は宮古島の南西端の小岬にあって、④の西方に広がるサンゴ礁の南端の海岸に位置する。⑤は東平安名岬先端附近にある離れ岩の干瀬である。

これらの中の③④⑥のおかみは、サンゴ礁が広く分布する海岸の岬に付けられている。岬の先端は潮流の速さと複雑さで航行する船にとって危険な場所であることが多く、日本人にとって岬は古来神の依り来たる聖なる場所として認識されてきた(『神と自然の景観論』p.49)。日本各地の岬には、静岡県石廊崎の石廊崎権現や鹿児島県佐多岬の荒神様などのように航海安全祈願の神が祭られている(上掲書 p.56)ことが多い。このような岬の神信仰を踏まえたうえで作製者は、岬の自然環境から③④⑥のおかみを安置したと推測される。

⑤のおかみは、東平安名岬の先端の東方 1.5 kmほどにある離れ岩で、その西方にはサンゴ礁が広がる。日本では古くから岬の先端の先に離れ小島・岩があると、神が依り来たる場所は岬の先端ではなくてその離れ小島・岩となる(上掲書 p.51)。鹿児島県南部や奄美諸島で立神、沖縄島でトンバラと呼ばれているのがその例である。このような岬の先端に位置する離れ小島・岩に神が依り来たる信仰と、その神による安全航行の加護を願う観点から作製者が名付けたのが⑤のおかみと思われる。

⑤のおかみと同様に離れ小島・岩の事例が①と②のおかみである。しかし①と②のおかみは、⑤のおかみとは違って岬の先端から離れた位置にある。それ故⑤のおかみとは別の視点で見ていく必要がある。

①と②のおかみを結んだ南北の線を境に、その東西の海域環境は異なる。東はうねりのある外洋域で、西はサンゴ礁が広く分布する海域である。沖縄島など北東方向から宮古諸島北部海域に接近して来る船は、この①と②のおかみの間を通り池間島を迂回してはり水へ向かう。この経路は「絵図」にも朱線で示されている。この２ヵ所のおかみは、南北にわずか８kmほど離れた位置にあり、北東方向から宮古諸島北部に接近して来る船の山当てとしては海抜 70m余の大おかみ嶋である。このことは明治期に刊行された水路誌にも記されている[※16]。この点から①のおかみは、②のおかみとともにサンゴ礁分布海域への入り口を示していると思われる。このことは①の筆のおかみの「筆」が、「書き始める」の意味で“筆を下ろす”(『必携国語辞典』角川書店)ということ、また沖縄県金武町並里区にある小地名フディムイが土地測量を最初に行った場所に由来するという[※17](『並里区誌　戦前編』、p.210)ことから推測して「最初の、一番目の」を意味し、転じて「入り口の」を意味すると思われるからである。

①と②のおかみの間を通過後は、池間島を山当てにして航行することになる。このことは、絵図帳に池間島とフデ岩の方位関係と距離、池間島と八重干瀬西端の方位関係と距離が記されていることで推測できる。また①と②のおかみには、他の場所のおかみと同様に神の加護による航海安全を願う航海者への配慮もあると考えられる。

以上のことから①と②のおかみは、危険なサンゴ礁海域への入り口を表す目標物であることと、安全航海のための加護を願う神の依り来る場所であることを示すために名付けられたと思われる。宮古諸島北部海域に北東方向から接近

して来る船を安全に八重干瀬南端と池間島の間に向かわせるためには、すなわち「絵図」にある八重干瀬南側の航路を確実に航行させるためには、その航路の入り口を示す目標物を示す必要があり、それが①と②のおかみであると言える。

「絵図」における八重干瀬の筆のおかみは、大おかみ嶋とともに安全な航路の入り口を示すための作製者の意図が込められていると思われる。そして実際は数km離れているフデ岩まで岬状に白色で着色したのは安全な航路の北側境界を示す意図もあると思われる。筆のおかみは、安全な航路の入り口を示す北側の航路標識であると言える。したがって南側にある大おかみ嶋とは対をなすことになる。

【伝説・伝承の視点から】

八重干瀬にもっとも近い位置にある池間島には、八重干瀬及びフデ岩について次のような神話伝説が伝えられている[※18]（『わが池間島　改定版』p. 71～72）。

この伝説では、フデ岩（「絵図」の筆のおかみ）近海は穏やかな海域であり、八重干瀬近海は波の高い海域である、と認識されていることがわかる。また八重干瀬近海が穏やか海況になることもあるとしている。

八重干瀬及びフデ岩の周辺海域の海底地形は、八重干瀬の北・西は急勾配で数百mの深さに至り、フデ岩の東も急勾配で 100m近い深度に達している。このような海底地形の影響などもあって、八重干瀬及びフデ岩の外洋側は常にうねりが押し寄せる環境下にある。さらに北東方向からの風が吹くときはフデ岩の東側海域で、北・北西の風が吹くときは八重干瀬の北・西海域で荒れが特に目立つことになる。

八重干瀬及びフデ岩は、白波のたつ自然条件は大差がなく、白波の発生する範囲に大きな違いが見られる。大きな白波の発生について、八重干瀬は規模も大きくて池間島からも視覚的に確認できるが、フデ岩は規模も小さく池間島からは視覚的な確認は困難である。このような視覚的な印象の違いが伝説の内容に反映された可能性が考えられる。

この伝説の内容から八重干瀬及びフデ岩について色彩的に表現するならば、荒れた海の八重干瀬は白色となり、フデ岩はそうではないことになる。

「絵図」における八重干瀬の白色による表現は、池間島に伝わる伝説に基づいて色彩表現した要素もある可能性があると推測される。

【類似表現の視点から】

「絵図」には、八重干瀬と同様に実際とは大きく異なるサンゴ礁の分布が描かれている事例が久米島の東岸にも見られる。東岸にある奥武島・オ―ハ島から東方に延びるサンゴ礁が描かれており、その先端に「おかミ崎」が記されている。さらにこのおかミ崎まで延びるサンゴ礁が久米島最南端の島尻崎から描かれている。あたかもおかミ崎を尖端とする“鏃”のような形状で２方向のサンゴ礁が描かれている。

この２つのサンゴ礁のうち前者は、久米島東岸から東方に長さ約 11 kmほど直線状に突き出ており、その上面にはハテノ浜（砂洲島）が見られる実在のサンゴ礁である（地形図「久米島東部」）。このサンゴ礁について「絵図」には「まちや入江ョリおかミ崎迄七里」（『琉球国絵図』p. 78』）、絵図帳には「おかミ崎ゟまちや入江之間七里」（上掲書、p. 114）とそれぞれ記されている。また「絵図」には、まちや入江（久米島）と那覇湊を結ぶ航路がこのサンゴ礁の北側を通るように朱線で示されている。「絵図」と絵図帳にサンゴ礁の延長距離を明示することによって、先述の航路による航海者に注意を促す意図が作製者にあったと推測される。

一方後者について、絵図帳では「おとのはら

おかミ瀬と島尻崎之間十町」や「嶋尻崎ゟ西目崎迄干瀬續二町三町四町以上出ル」（上掲書 p. 113、114）と島尻崎の周辺・以西の海岸の状況について記しているが、前者のサンゴ礁に関する記述とちがっておかミ崎と島尻崎の間の距離に関する記述は「絵図」及び絵図帳には見られない。後者が架空のサンゴ礁であることを示唆しているように思える。実際に架空のサンゴ礁であることは国土地理院発行の地形図でも確認できる（２万５千分の１地形図「久米島東部」）。

また絵図帳における先述の内容から、島尻崎の先には「おとのはらおかミ瀬」があることがわかる。島尻崎には「 おとのはらおかミ」が宿っていることになる。おかミ崎と島尻崎の２ヵ所におかミが依り来たり、付近を航行する船の守り神として位置づけられていたであろうことが窺える。

おかミ崎の先には、久米島西岸にある兼城湊と慶良間諸島との間を結ぶ航路が朱線で示されている。この航路で慶良間諸島から兼城湊へ航行する船にとって、ハテノ浜のあるサンゴ礁は船に向かって飛んで来る矢の如き存在と「絵図」作製者は捉えたと思われる。それが架空のサンゴ礁を付け加えた、あたかもおかミ崎を尖端とする鏃をイメージさせる描き方に反映されたと推測される。「絵図」閲覧者がこの鏃状に描かれたサンゴ礁を見たときに攻撃用武器である矢を想起することを作製者は想定したであろうと考えられる。

「絵図」作製者は、おかミ崎を先端とするサンゴ礁が海岸まで続いていて危険であることを「絵図」閲覧者に強く意識させるためにおかミ崎を尖端とする鏃の形状に描いたと思われる。そして鏃の形状にした背景には、武具である矢についての知識を有する人々が「絵図」の閲覧者であることを想定していたと思われる。

このような実際とは大きく異なるサンゴ礁の分布状況の描き方は、作製者が「絵図」閲覧者の文化的背景を意識していたためだと思われる。八重干瀬南側海域において船が取るべき針路を強調するために、作製者が架空のサンゴ礁を描き加えて八重干瀬の形を地曳網状に描いているのと同じ考え方と言える。

５　まとめ

江戸幕府の命で薩摩藩が作製して幕府に献上した琉球国絵図（1648 年）には、八重干瀬の形状がおよそ７㎞離れているフデ岩を一体にするなど実際とは大きく異なる形状で描かれている。その理由について複眼的に分析・考察した結果、次のように推測される。

①形の視点から。現地調査を行い「絵図」の作製を直接担当したのは薩摩藩士と江戸から派遣されてきた狩野派の絵師であった。「絵図」作製当時、地曳網漁文化圏が西日本を中心に日本各地に広がっていたことから、両者の地曳網漁についての認識に違いは無かったと思われる。そして地曳網漁は網の内側の魚類を一網打尽にする漁法であることを周知している人々が「絵図」の閲覧者であることを想定し、八重干瀬が航行上の難所であることを強く印象づけるために地曳網状の形にしたと推測される。

②色彩の視点から。「絵図」作製者は、白髭水の伝説などにみられるように当時の人々の白色に対する危険予告や危機からの救出という印象があることを踏まえて、予告・救出の二重の意味を込めて白色で八重干瀬を表現したと推測される。

③地名の視点から。「絵図」作製者は、サンゴ礁分布海域において航路沿いの岬などに「おかみ（おカミ）」を置いて山当てとともに航海安全の神の鎮座する聖地とした。八重干瀬の筆のおかみは大おかみ嶋とともに安全な航路の入り口を示す山当て（航路標識）であるとともに航海

安全の神の鎮座する聖地に位置づけていたと推測される。

④伝説・伝承の視点から。池間島に伝わる伝説では八重干瀬の神は荒魂の神である。そのためその神がいるときの八重干瀬は波涛の押し寄せる海域となるという。この伝承が反映された彩色になった可能性もあると思われる。

⑤類似表現の視点から。「絵図」作製者は、「絵図」閲覧者の文化的背景を踏まえて航行上の危険性を強く印象づけるために架空のサンゴ礁を描き加えておかミ崎を尖端とする鏃の形状に描いたと推測される。この描き方の背景にある考えは、八重干瀬の描き方にも通ずるものと言える。

以上のことから、八重干瀬の「絵図」における表現は「絵図」作製の基本を踏まえつつ当時の人々の文化的背景を考慮して白色の地曳網状の形に描かれたと推測される。

注釈

※１　国絵図とは、60 余の国を単位とした地図であり、国家レベルでの一律的な地図の作製である。豊臣秀吉の指示による天正 19(1591)年のものが最初とされ、江戸時代には慶長９(1604)年、寛永 10(1633)年、正保元(1644)年、元禄 10(1697)年、天保６(1835)年に作製事業が始められた。これらは製作時期によって違いがあり、正保の国絵図では交通路の表現を大きな目的とした。（『景観からよむ日本の歴史』p. 28～29）

※２　「絵図」には作製の際の海上交通に関する次のような留意事項がある。

「　被仰出候条書写之写
　絵図書付候辺之覚
一　此湊岸ふかく舟懸自由
一　此湊少荒磯ニ候へ共舟懸自由
一　此湊遠浅ニ而舟入かね候
一　此湊南風之時分者舟懸悪候
一　此湊西風之時分者舟懸不成候
一　湊と湊との間いにしへより申伝候海上道法書付之事
一　船道水底ニはえ有之所書付之事
一　他国之湊口海上道法書付之事
一　潮時ニ不構舟入候湊書付之事
一　潮時悪候へハ舟不入湊書付之事
一　此渡り口何里あらしほの事
一　浜辺遠浅之事
一　此所左右ニ岩有之事
一　遠浅岩つゝきの事
一　右書付之外舟道悪所候ハヽ不残書付之事
一　湊之名書付之事
一　浦々之名書付之事
　寛永廿一年十二月十六日」(p. 14)

※３　八重干瀬の範囲、島嶼・サンゴ礁間の距離や方角は、２万５千分の１地形図「西平安名岬」で計測したものである。

※４　池間島では、干出するサンゴ礁はビジ(又はッシ)、干出しないサンゴ礁はミジュキと区別して表現される。

※５　『国指定名勝及び天然記念物「八重干瀬」保存活用計画策定報告書』p. 20

※６　八重干瀬の南側を通る朱線の側には「悪鬼納嶋之内赤嶋ヨリ宮古嶋はり水迄海上七十五里未申ノ方ニ當ル」と記されている(『琉球国絵図史料集第一集』p. 84、85)。赤嶋とは慶良間諸島の阿嘉島。未申で示される方角は南西であり、宮古島から見れば北東の方角に当たる。

※７　燧火の制が宮古で実施された年は県史には明記されていない。(『沖縄県史別巻　沖縄近代史辞典』1977 年　沖縄県教育委員会 p. 396)

※８　「宮古島所遣座例帳」(書写)には２人体制と記されている。平安名にも火立の役割が課されていた。(沖縄県史料編集所(1991)『沖縄県史料　前近代　首里王府仕置３』沖縄県教育委員会　p. 804～805)

※９　同様の表現は久米島の東岸にも見える。また、白色だけで表現されている事例は、勝連半島と平安座島との間の沿岸に見られ、白色部分の中には「干潟」と墨書されている。

※10　絵師の簗瀬清右門は、幕府が推薦した江戸の狩野派の絵師であろう。（『琉球国絵図史料集第一集－正保国絵図及び関連史料－』p. 16）

※11　直角三角形の３辺には斜辺の２乗＝（底辺の２乗＋高さの２乗）の関係がある。絵図帳の記述内容から斜辺（フデ岩～八重干瀬西端）底辺（池間島～フデ岩：弐里拾町＝約 8.9 ㎞）高さ（池間島～八重干瀬西端：壱里拾六町＝約 5.8 ㎞）で計算した。

※12　地曳網漁は、中世に大坂湾ではじまり、その後九州や東日本へ伝播していった。西の中国・九州には中世末までに、東の九十九里へは弘治元（1556）年に伝わった。需要の多かった魚肥用のいわしだった。（『近世日本漁村史の研究』新生社　p. 267～269、469～471）

※13　ヨナタマ伝説については「宮古嶋記事仕次」（1748）に「伊良部下地という村洪濤にひかれし事」として次のように記されている。

「むかし伊良部嶋の内下地といふむらありけ(り)れある男猟に出てゝよなたまといふ魚を釣るこの魚ハ人面魚躰にして能々ものいふ魚となり猟師おもふやうかゝるめつらしき物なれ(り)ハ明日い津れも参会して賞翫せんとて炭をおこしあふりこにのせて乾ハかしけり其夜人志つ満りて後隣家に或童子俄に啼をらひ伊良部村へいな(か)んといふ夜中なれ(り)ハ其母いろいろこれをすかせとも止す泣さけ不事いよゝゝ切なり母もすへきやうなく子を抱て外へ出たれハ母にひしといたきつきわなしきふるふ母も恠異のおもひをなす所にはるかにこゑをあけてよなた毎々々何とて遅く帰るそといふ隣家に乾かされしよなた毎の曰われハ今あらすミの上にのせられあふり乾かさるゝ事半夜におよへり早々犀をやりて迎ひさせよとこたふ母子ハ身の毛よたつていそき伊良部村にまひる人々あやしミて何とて夜ふかく来ると問ふ母志かゝとこたへて翌朝下地村へ立かへりしに村中のこらす洗ひつくさ(り)れて失たり今にいたりて其村の跡形ハあ(り)れ共村立ハなくなりにけり彼母子いかなる隠徳ありけるにやかゝる急難を奇特にのかれし事こそめつらしけ(り)れ」

（『平良市史　第三巻　資料編１　前近代』p. 82～83）

※14　石垣島大浜の崎原御嶽の由来を伝える「琉球国由来記」（1713 年）の巻二十一には　次のような記述が見られる。

「崎原御嶽　　大濱村

神名、崎原神根付

御イベ名、フシカウカリ

右御嶽立始ル由来。上古、大濱ト云フ所ニ、ヒルマクイ・幸地玉ガネト云フ、兄弟アリ。其頃、當島ニ、鋤鍬鎌ナク、何カト相求度思ヒ、船ヲ作リ、水主相催、兄弟中乗ニテ開洋ス。

然ルニ、薩州坊泊ノ、下町ト申泊へ着岸、望ノ鋤鍬鎌ヲ買フ。折節、白髪成老人立寄、汝何國ノ人、何方ノ船ト問。答云、八重山島、ヒルマクイ・幸地玉ガネト云者、鋤鍬鎌、為レ可レ買、此島ニ来ルト云フ。

又問云、汝島ニ、崇敬スル神アルヤ、ナクバ可レ授ト云。兄弟悦ビ、授ケ給ヘト申ス。彼老人、櫃壹相封ジ、渡テ申様、此櫃、於二洋中ニ一可レ鳴、必其鳴方へ船可レ乗。無二何事一、島ニ可レ着也。於レ島、汝伯母妹申請、此櫃可レ開ト、相語ル。兄弟、謹而頂戴仕ル。折節、順風、能吹出シケレバ、神ノ御風ト悦ビ、纜ヲ解キ、帆ヲ揚、洋中ニ乗出ス。老人ノ云シゴトク、此櫃鳴ル。奇妙ニ思ヒ、開見ルニ、何モナク、空櫃也。不審成事ト思フ處、風相替、本ノ坊泊へ吹着ル。

又先ノ老人立寄、汝等洋中ニテ、櫃ヲ開哉否哉ト問フ。兄弟有ノ儘ニ語ル。老人又封

ジテ云、曾而此櫃、洋中ニテ、不レ可レ開ト、堅申サレケル。兄弟、謹而禮拜セバ、追風又吹出ス。
兄弟悦ビ帆ヲ揚、如レ教、櫃ノ鳴方へ乗掛レバ、順風ニテ、無レ程大濱村、崎原ノ泊ニ帰着ス。〈後略〉」（『琉球国由来記』p. 600～601）（下線は引用者）。

※15　「絵図」及び絵図帳に見られる「おかみ（おかミ）」地名の分布は、次の通りである。奄美諸島 11（「絵図」11）、沖縄諸島３（「絵図」１・絵図帳２）、宮古諸島６（「絵図」４・絵図帳２）、八重山諸島７（「絵図」５・絵図帳２）。奄美諸島は９ヵ所が「おかミ山」である。

	地　名	沿岸の港・航路・海況（所在位置）	所在島
	〈「絵図」〉		
1	おかミ山	わん泊。わん泊（喜界島）～せった（奄美大島東岸）	喜界島
2	おかミ山	せった～ふかいが浦湊（奄美大島北端附近）	奄美大島
3	おかミ山	名瀬（奄美大島北部）～せった	奄美大島
4	おかミ山	西之古見湊（奄美大島南西）～住用（同島南東）	奄美大島
5	おかミ崎	住用湊の南東岬。西之古見湊～住用。	奄美大島
6	そつかうのおかミ	御崎の先端。焼内湊（奄美大島南西）～西之古見湊	奄美大島
7	おかミ山	西之古見湊～うけ嶋（請島）。	こは嶋 （請島の北）
8	おかミ山	西之古見湊～伊ノ川（徳之島）	沖永良部島
9	おかミ山	北西岸の内陸部。湊・航路記載なし。	沖永良部島
10	おかミ山	北西岸の内陸部。湊・航路記載なし。８に近接	沖永良部島
11	おかミ山	北東端の岬（現在の国頭崎）の先端付近。 秋徳湊～和泊（沖永良部島） 西岸の内陸部。湊・航路記載なし。	沖永良部島
12	おかミ崎	那覇湊～久米島兼城湊	久米島
13	筆のおかみ	赤嶋（座間味村）～はり水（宮古嶋）	宮古島
14	大おかみ嶋	赤嶋（座間味村）～はり水（宮古嶋）	大神島
15	ひらせのおかみ崎※	湊・航路は無い。沖合に大きなサンゴ種	宮古島
16	ねくれのおかみ崎	はり水～多良間嶋・川平湊（石垣島）。 （現在のスキラ埼。その地先は埋め立て地）	宮古島
17	おかみ崎	川平湊～御崎泊（石垣島）。現在の御神崎。	石垣島
18	御崎おかみ	川平湊～御崎泊（石垣島）。現在の富祖崎。	石垣島
19	おかみ崎（ひけ川おかみ崎）	ひけ川村（西表島）～鳩間嶋	西表島
20	おかみ崎	御崎泊（石垣島）～そない村（石表島）	西表島
21	おかみ崎	そない村（西表島）～與邦國嶋	与那国島

	〈絵図帳〉		
22	おかミやま	かひ嶋(嘉比島)と赤嶋(阿嘉島)の狭い海峡。戸無嶋(渡名喜島)・久米嶋への航路。	座間味村
23	おとのはらおかミ瀬	嶋尻崎。慶良間諸島～久米島兼城湊。	久米島
24	ひゃくな崎之はなれおかみ	航路無し。大きなサンゴ礁あり(東平安名崎先端の離れ岩)。	宮古島
25	赤崎之おかみ崎	航路無し。来間島との間にサンゴ礁(付け根に赤崎御嶽有り)	宮古島
26	ミさきおかみ	ミさき泊有り。川平湊～御崎泊(石垣島)の航路など。	石垣島
27	中之ひけ川おかみ崎	沖にサンゴ礁。	与那国島

『琉球国絵図史料集第一集－正保国絵図及び関連史料－』より作成。

※上の表中の※は、「宮古八重山両島絵図帳」では「ひるせのおかミ崎」と記されている。

※16　大神島が山当てとして認識されていたことは「(宮古)列島皆平坦ニシテ高山巨岳啼ク唯男神(大神島)ノ一島突起スルノミ故ニ此ヲ以テ航客ノ此ノ列島ニ近ツクヲ識認スヘキモノトス」(『寰瀛水路誌第一巻(下)』p.818)からもわかる。また『南嶋探験１』の７月６日の条に「午前５時、西々南ニ当テ一ノ小尖嶋ヲ遥望(えんぼう)ス。乃チ宮古嶋群嶋ノ一ナル大神(おがみ)嶋ナリ。」(p.172)と記されており、北東方面から接近して来る船にとって大神島が目標になっていたことが窺える。

※17　『並里区誌　戦前編』に次のような記述がある。

「フディムイとフリムン

喜瀬武原に行く途中、双頭原入口に小高い森がある。雑木とイチゴ、雑草の生えたこの森を地元の人々はフディムイ（筆森）といった。この森は土地測量の基点となった場所であったことから、フディムイと呼称されるようになったと古老は話している。年月の経過と共に、何時の間にかフディムイはフリムンに言葉が転訛してしまったと古老は話している」(p.210)。

※18　八重干瀬及びフデ岩についての伝説は以下の通りである。〈話者は 1902 年池間島生まれのムヌスー(霊媒者)・山城メガサラ〉。

「フディ(フデ岩)の神様の名前は、マガナス(真加那志)というそうだ。慈悲深い女神様だよ。だからフディの海はいつでも滑らかな海だって。八重干瀬の神様の名前はトゥガマラというそうだ。大変に怒りっぽい男の神様だよ。だから八重干瀬の海は波が砕け散って荒海だって。フディの神様と八重干瀬の神様は夫婦の神様だって。女神様は姉で男神様は弟だって。姉弟の夫婦の神様サーヨ。二人の神様は愛し合っているって。トゥガマラ神様が八重干瀬にいるときは、八重干瀬の海は荒海だって。ところがトゥガマラ神様がフディに行っているときは、八重干瀬の海も滑らかだって。」(『わが池間島　改定版』p.71～72)

参考・引用文献

国土地理院(2000)　５万分の１地形図「宮古島北部」

国土地理院(1989)　２万５千分の１地形図「西平安名岬」

琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課(1992)『琉球国絵図史料集第一集－正保国絵図及び関連史料－』沖縄県教育委員会

宮古島市史編さん委員会(2012)『宮古島市史　第一巻通史編　みやこの歴史』宮古島市教育委員

会　p. 48
笹森儀助著・東望校注(1982)『南嶋探験１　琉球漫遊記』　東洋文庫　平凡社　p. 172
乾克己ほか編(1987)『日本伝奇伝説大事典』角川書店　p. 472
鈴木牧之編撰・京山人百樹册定・岡田武松校訂(1936)『北越雪譜』岩波文庫　岩波書店　p. 94～95
伊良部村史編纂委員会(1978)『伊良部村史』伊良部村役場　p. 1472～1473
平良市史編さん委員会(1989)「雍正旧記」『平良市史　第三巻　資料編１　前近代』平良市役所　p. 50、82～83
伊波晋猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』琉球史料叢書　名取書店
長沢利明(2019)『江戸東京の庶民信仰』講談社学術文庫　講談社　p. 214、215
酒井シヅ(2008)『病が語る日本史』講談社学術文庫　講談社　p. 49
中田祝夫・和田利政・北原保雄編(1983)『古語大辞典』小学館
野本寛一(2006)『神と自然の景観論』講談社学術文庫　講談社　p. 49
大野晋・田中章夫編(1995)『角川必携国語辞典』角川書店
並里区誌編纂員会(1998)『並里区誌戦前編』〔沖縄県金武町〕並里区事務所　p. 210
伊良波盛男(2018)『わが池間島　改訂版』池間郷土学研究所　p. 71～72
国土地理院(1987)　２万５千分の１地形図「久米島東部」
金田章裕(2020)『景観からよむ日本の歴史』岩波新書　岩波書店　p. 28～29
沖縄県宮古島市教育委員会(2016)『国指定名勝及び天然記念物「八重干瀬」保存活用計画策定報告書』沖縄県宮古島市教育委員会　p. 20
荒居英次(1963)『近世日本漁村史の研究』新生社　p. 267～269、469～471
水路部(1886)『寰瀛水路誌第一巻(下)』p. 818